



「非文字資料」と歴史学

的場 昭弘（神奈川大学大学院経済学研究科・教授）

1 歴史学は文字資料のみを対象としてきたか

歴史学は、一般に文字資料を対象としてきたといわれる。しかし、実はこの表現にも歴史がある。固有の意味での文字資料への研究が始まるのは、西欧では一九世紀の実証史学の成立以後のことにすぎない。

もともと歴史学は、王朝成立の神話を流布するための学問でもあり、ある王朝成立の過程をもっともらしく説明するという任務を帯びていた。その限りにおいて、文字資料はあくまでも当該の王朝に有利な資料であり、それ以前の王朝や、他の王朝に関する資料は無視、いや焼却すべきものとされた。

もともと王朝史は文字資料よりも、神話に依存していた。国王として神秘的な力をもつ人物の能力は、資料的に説明のつくものではない。むしろ神秘的な王権は、国王の人格を超越したところにあった。ルイ14世の「朕は国家なり」という言葉は実証を超えていたのである。

しかし、絶対王政にいたる17世紀以降は、国王は神秘的な力によって王権を維持することができなくなり、民衆に国王としての権力を付与させるために王朝の歴史が必要とされたのである。その限りにおいて王朝史にも実証史的な側面が必要となる。数々の啓蒙主義時代の政治的事件が、王権の検閲を経ながらもそれなりに実証的な側面をもっていたのには、そうした理由があった。だから、それなりの資料が王朝の中に保存されていたのである。

フランス革命以後、書物や絵画を含めた資料類の国家による保存が実施されたことは、王朝史から実証史学へと進む大きな基礎を作った。国立図書館、国立美術館、国立古文書館などの設立は、歴史研究を一気に資料研究へと発展させることになる。こうして歴史学と文字資料との深い関係が始まった。

しかしすでに保存された資料の多くは過去の王朝に有利なものであった。このことは文字資料という一見客観的に見える資料も、実は初めから歪められた形でしか存在していないことを意味していた。

しかも、19世紀後半に起こる近代国家の成立により、歴史学はあらたな「王朝」、すなわち国民国家という「王朝」へ資するための道具となった。そのため実証史学の研究には、大方国民国家成立と、その発展を祖述する役割が負わされることになる。その意味で、皮肉にも王朝史がもっていた国家という空間と時間を実証史学も共有することになった。その意味でドイツ史はプロイセン王朝史と交錯し、フランス史はブルボン王朝史と交錯する。

実証史学の発展は、19世紀末のダーウィンの進化論の影響も強く受けていた。一国の発展を進化論的に説明するという方法は、歴史という時間を目的化し、その空間を国家に限定することになった。歴史書が一般に読まれ始めたのは、フランスでもドイツでも普仏戦争（1870年）の後である。その理由は、国民意識の高揚の役割を歴史学が負い、そのために文字資料が駆使し始められたからである。

2 文字資料に抜け落ちた空間と時間

こうして始まった歴史資料学は、最初から国民国家の学という責務を負うことになった。しかしそれは古文書館に保存された資料からいって当然の成り行きでもあった。国民国家が普遍であるという価値意識が与えられれば、自らの資料研究はあたかも客観的な学問であるかのように見える。そこに実は実証史学の陥穽があったのである。

20世紀に起こった二つの世界大戦は西欧に大きな衝撃を与えた。相次ぐ戦争と国家の解体、分裂によって、国民国家は空虚な前提の上にあったにすぎないということが明らかになった。アナール派の歴史学、実存哲学はその間隙をぬって登場した。

歴史はそれ自体目的を持つものでもなく、歴史学の対象空間も国家に限られるものでもなく、それを決定するのは現在生きている人間であるということが20世紀歴史学の最大の成果である。国家や民族は歴史の中に客観的にあったのではなく、それを後から発見したのは歴史家

であるという反省こそ、新しい歴史学の始まりとなった。客観的叙述のための文字資料も、実は歪められた国民意識によって解釈されたものにすぎないということが明らかになったのである。

文字資料という客観的に見える資料が、実は人間という客観的でないものによって見られているにすぎないものであるということは、問題は歴史資料にあるのではなく、それを研究する歴史家という人間の方にあるということの意味している。

こうして時代は、文字資料への物神崇拜の時代から、歴史家自身の世界観による文字資料の解釈の時代へと進んでいった。そしてそれは多くの場合、文字資料そのものではなく、文字資料を読むことによって生じる表象の問題となった。歴史がその時代の人々にどう写っていたかという問題こそ、もっとも切実な問題となったのである。

3 非文字資料とはなにか

歴史学にとって、文字資料は実はたんなる歴史を知るための媒体にすぎない。同じことは文字でない非文字資料についても言える。文字資料を見れば、そこに真実が隠されているというような素朴な意識をもつ歴史家はおそらく今ではないだろう。

資料は当然歴史学の生きている時代の価値に左右されている。ということはそれを価値たらしめる社会が存在することを意味する。王朝史から見てガラクタだった文字資料は、国民国家にとって重要な資料になった。国民国家の時代にガラクタ同然であった民衆の非文字資料は重要な資料になっている。問題は資料を価値たらしめる社会にあると言える。

とすれば、新たな歴史を開くために非文字資料を見つけるということは、ただたんに新しい媒体をそこにみつけるというものであってはならないはずだ。もちろん、文字資料が消失しているか、そもそも存在しなかった歴史を見るには、非文字資料を見ること自身新たな発見でもあろう。しかし、それとても文字資料が負った欠陥を補うほどのものではない。非文字資料も資料という媒体である以上、そこに時代の価値観が反映されているからである。

『記憶の場』(谷川稔監訳)と言う長大な論文集を編集したピエール・ノラは、「歴史に基づくモデルに対して、記憶に基づくモデルが勝利を収めたのだ」(3巻、岩波書店、2003年、441頁)と述べているが、歴史が「もの」と

しての資料ではなく、「もの」が意味する表象としての記憶の方におもむきを置き始めた以上、歴史は取り扱われるべき資料の側にあるのではなく、取り扱われるべき人間の側にあるといえる。

とすれば、非文字資料を収集し、それを再現するということは、おのずとただ単に文字資料の代替、またはそれを補完することだけに向けられるべきではない。皮肉なことに西欧でも、文字資料の収集(特に国民に関する公文書資料 ここで公文書資料という場合、出生証明書、死亡証明書などを指している)は書庫に収集しきれないほど増え続けている。しかも、非文字資料たる景観や、記念碑、建築物の保存などといったもっと大規模の資料の保存も広がりつつある。

文字資料の問題は、けっして残された資料が偏っていたこと、また少なかったことにあったわけではない。問題は、それを解釈する現在に生きた人間の問題意識の不足の側にあったといえる。とすれば、保存することに熱意をそそぐ必要がどれほどあるのかが問われよう。保存維持という物神的側面にのみ目が向けられれば、世界はそれこそ博物館になる。逆説だが、これほど資料が多いということも博物館ですらある時代の価値の反映なのである。

文字資料も含めて、非文字資料にもガラクタがある。そのガラクタを整理せずひたすら集め、整理することはけっして学問ではない。どのような資料を集め、整理するかということは歴史家の世界観にかかっている。歴史にはあえてそうした世界観が求められているのである。文字資料の残存が社会の価値によって決定されたように、非文字資料の残存も価値に左右されている。資料自体は社会の価値観からかけ離れた中立的なものはないということをもまず認識すべきであろう。神奈川大学が関係している常民の歴史というマイクロコスモスの歴史でさえ、深く時代の価値に左右されている。何が残すべきものなのか、何が記憶されるべきものかの判断が、歴史家たるものにはつねに求められているのである。COEの非文字資料研究には、やみくもな資料保存ではなく(つまり過去の忘れられた世界の保存ではなく)21世紀に生きる人々の記憶の保存としての役割も負わされていることを忘れてはならないだろう。